

心と身体を健康を育む滋賀づくりへ その核を担う県立病院事業。 待ったなしで「あるべき医療」に挑む。



滋賀県病院事業庁・庁長 菅田 昌孝氏
滋賀県立成人病センター総長

interviewer
頭取 大道 良夫 守山支店長 久保田 真也

65歳以上人口の割合が25%を超え、すでに超高齢社会を迎えている日本。滋賀も例外ではない。現在の医療の枠組みだけでは対応しきれない2025年問題に備えて、県民の健康を守り続ける滋賀県病院事業庁は「将来を見据えた新たな医療」の構築を目指している。

全県を視野に入れた高度医療で 県民の健康を守る

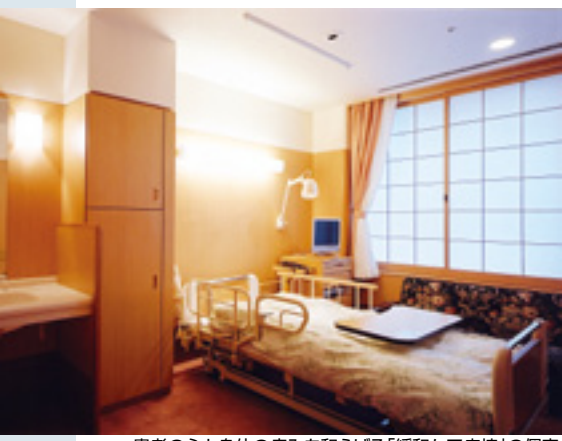
大道 ●「医療の充実」を求める県民の声に応えるため、滋賀県はがん、血管病、生活習慣病、小児難治性疾患、精神疾患障害それぞれ分野の拠点病院として成人病センター、小児保健医療センター、精神医療センターの3つの県立病院を運営。さらに3病院の事業を管理する病院事業庁を設けて、医療の質と患者サービスの向上に取り組んでいます。菅田昌孝先生は病院事業庁庁長として滋賀県全域の医療の充実に取り組まれるとともに、がん、循環器疾患、脳神経疾患の三大生活習慣病に対する高度専門医療の拠点である成人病センターの総長として、湖国の健康増進の最前線に立たれています。

菅田 ■病院事業庁は2012年に策定した中期計画に基づき、「県民から最も信頼される病院づくり」「将来の医療福祉を見据えた病院機能の構築」「安定的な経営基盤の確立」を目指しています。



がん患者の高度医療を可能にする「放射線治療装置」

大道 ●滋賀県立成人病センターの開設は1970年。当時、日本人の三大死因の脳卒中、がん、心臓病に高血圧や糖尿病などと合わせて「成人病」と呼ばれた病が注目され始めた時代でした。
菅田 ■集団健診や施設健診を中心にスタートした当時から、成人病対策に重点を置いて徐々に診療科を増やしていき、19の診療科を持つようになった86年頃には成人病対応の中核拠点としての陣容がおおむね整ったかと思えます。新館ができた03年も大きな転機でした。放射線治療装置などを用いた先端医療を目指し、が



患者の心と身体の痛みを和らげる「緩和ケア病棟」の個室

ん、脳血管疾患、心疾患などに対する高度専門医療拠点の役割を担うことを目指しました。この7月にはさらなる機能充実のため新病棟の建設に着手し、2年後の完成を目指しています。
久保田 ●新病棟は、移植医療や超高齢社会に処置できる医療として「高度な新しい医療の仕組み」を成人病センターづくりあげ、全県へ広げていく取り組みの重要な柱になりますね。

身体の痛みを取る医療から 心の痛みを取る医療へ

菅田 ■そうですね。超高齢社会を迎えて、多くのがんは高齢者がなる病気と考えていいですから、身体と心に優しい医療が求められます。先端医療機器を活用しながら、迅速な診断と的確な治療を心掛けています。また、心臓や脳の血管病は一命を

取り留めても障がいの残ることがあり、診断・治療とともにリハビリテーションが重要になります。運動機能の回復をサポートする装着型ロボット等に注目しながら、医療以外の分野の知恵もお借りして、滋賀県にリハビリのための先進的な仕組みをつくりたいですね。

大道 ●がんに関しては、成人病センターは都道府県がん診療連携拠点病院に指定され、県内各地にあるがん拠点病院と密接に連携し、滋賀のどこに住んでも最適ながん医療が受けられる仕組みづくりを担っておられます。また、緩和医療にもいち早く着目され、新館10階の緩和ケア病棟を中心に、がん患者さんやご家族の心身の痛みを和らげ、日常生活を快適に過ごすためのサポートに取り組まれています。

菅田 ■緩和ケア病棟では、がん患者さんの状態やお考えに沿って治療を進めながら、心の痛みへのケアを行っています。病室は全個室で、「家庭の一室で暮らす環境」の提供を心掛け、障子や木目調の壁紙を取り入れた和風の部屋を配しています。広いダイニングや喫茶室、家族室なども備え、運営はボランティアの方々協力によって支えられています。身体の痛みを無く医療は発達していますが、心の痛みに対する医療はまだ不十分です。身体とともに心の痛みを和らげるには精神科医や



滋賀県病院事業庁・庁長 滋賀県立成人病センター総長

菅田 昌孝氏

(ささだまさたか)

1970年、京都大学医学部卒業。2003年、京都大学医学部・人間健康科学科教授に就任。2009年、滋賀県立成人病センター総長・病院長に就任。2014年、滋賀県病院事業庁・庁長に就任。

望ましい健康づくり

- ・滋賀県のどこに住むどなたにも適切な医療を届け
- ・三世代それぞれが自立して日々健康な生活を送り
- ・住み慣れたところで安心して老いる

病院概要

滋賀県立成人病センター

- 所在地/守山市守山5-4-30
- 許可病床数/541床(一般)
- 標榜科/血液・腫瘍内科、糖尿病・内分泌科、老年内科、免疫内科、神経内科、循環器内科、消化器内科、呼吸器内科、総合内科、外科、整形外科、脳神経外科、呼吸器外科、心臓血管外科、泌尿器科、婦人科、眼科、耳鼻いんこう科、皮膚科、麻酔科、放射線診断科、放射線治療科、緩和ケア科、リハビリテーション科、歯科口腔外科
- URL/http://www.pref.shiga.lg.jp/e/seijin/

プロフィール

- 1970年 成人病センター開設
- 1975年 外来診療開始
- 1980年 救急特殊病棟開設
- 1988年 MR棟開設
- 1999年 成人病センター研究所開所
- 2002年 地域がん診療拠点病院指定
- 2003年 新館(284床)開設
- 2006年 リハビリテーションセンター医療部外来入院診療開始
- 2007年 がん相談支援センター開設
- 2009年 都道府県がん診療連携拠点病院指定



最新鋭のCT装置を前に、左から放射線技師、久保田支店長、菅田昌孝総長、大道頭取

臨床心理士との連携が必要ですが、緩和医療に携わる専門スタッフは不足しているのが現状で、長い目で見た人材育成が重要です。今後は、がん以外の病気も含め、病が進行した時期だけでなく診断を受けた時からすぐに心のケアを行えるような緩和医療を目指していきたいですね。

子供はのびのび、若者ははつらつとお年寄りはいきいき暮らせる社会を

大道●菅田総長は京都大学医学部教授として、人間健康科学に携わってこられました。「疾病や障害と共生しながら質の高い生活を支援する」ことをテーマに、医学を軸に看護学などの医療学、さらに人文社

薬のスペシャリストである薬剤師さんが各地域で「セルフメディケーション」をサポートすることで地域医療の担い手となるなど、これからの医療には医療専門職が不可欠。そんな発想から取り組まれている「医療専門職・医療関連職の育成」また、早期離床・早期退院を促す「ITを活用したリハビリテーションシステム」など、6つのプロジェクトを進めることで、「2025年が来ても大丈夫」な滋賀の医療環境づくりを着実に整備しておられます。

菅田●「これからのあるべき医療像」は「医の知恵」だけでは描けません。視野を広げた「医工連携」が必要です。ITなどの「工の知恵」を応用すれば、少ない予算で成果を得られる可能性があります。大

会科学がコラボレーションする視野の広い学問です。成人病センターでの取り組みは、人間健康科学を通じて総長が到達された「健康観」に貫かれていようように思えます。

菅田●医療の進歩でわが国は世界一の長寿国になりました。でも、これまで追いついてきた「身体」の健康「だけ」が全てではなく、「心の健康」も得られないと、真に健やかとはいえません。では、どうすれば心身ともに健康に暮らせる社会を実現できるのか。そのための仕組みを生みだし、育て、県内全域に広めることが私に与えられた役割であり、成人病センターの使命でもあると考えています。私が理想とするのは、「子供たちはのびのびと、若者ははつらつと、お年寄りはいきいきと暮らせる社会」です。滋賀がそんな姿になるように医療面から貢献していきたい。それには10年後の「2025年問題」を乗り越えなくてはなりません。

大道●2025年問題。その年に団塊の世代が75歳に達し、がんや認知症の患者、要介護の人が激増することでわが国の医療福祉財政が危機的状況に陥る…。滋賀県にとっても切実な問題です。

「2025年問題」を見据えて複数のプロジェクトが同時進行

菅田●その通りです。「病院と医師を増やせ」という発想ではこの危機は乗り切れま

学やものづくり企業が集積する、「工の知恵」に恵まれた滋賀には高いポテンシャルがあります。これを生かせば湖国の医療の未来は明るく、それを広く他府県や世界に発信できる。私はそう信じています。

心身の健康を育む「安寧の都市」へ守山から変える健康構想

大道●生まれつき難聴の子供の聴覚再生に取り組む「聴覚コミュニケーション医療センター」を守山市に設置するプロジェクトも、病・産学官の連携により成人病センターを中心に動き始めるそうです。ところで、総長が理想とされる「子供たちはのびのびと、若者ははつらつと、お年寄りはいきいきと暮らせる社会」を守山市で試

せん。現在、「治療から予防へ」二限られた医療資源を有機的に活用する「などいくつかの視点から、2025年を見据えた複数のプロジェクトを策定。成人病センターが一員となつていろいろな取り組みを進めています。久保田●その一つが、成人病センター研究所で取り組まれている「遠隔病理診断ネットワーク」ですね。

菅田●研究所では、遺伝子研究、がん研究、神経病態研究、画像研究などを進めるとともに、真鍋研究所長が中心となつて「遠隔病理診断ネットワーク」を立ち上げていくところです。これは病理医不足を解決するための全県型ITネットワークで、病理医がいらない医療機関でも病変部の画像データをネットワーク経由することで病理診断を行うというものです。従来の方法に比べて格段にスピーディーかつ正確な診断ができます。

大道●なるほど。「滋賀のどこに住んでいても必要な医療が受けられる」仕組みの一つですね。がん診断の地域格差是正に有効だと思えます。「県全域の医療情報の統括」も同じ目的を目指すプロジェクトですね。

ITを活用する「医工連携」が「医の知恵」を補う

菅田●私は「病・病診・在宅連携」という言葉を使っています。大病院で手術を受

験的につくりあげるモデル事業「安寧の都市」構想についてもお聞かせください。

菅田●これまで都市は機能性や効率を追求してデザインされてきましたが、超高齢社会を迎えたいま、「心と身体の健康を育む都市」へと再生されるべきではないか。そのためには「自然・環境・文化、教育、交通、情報、ビジネス(仕事)」などが必要不可欠であり、それに加えて医療があるのだと思います。高齢者は社会に役立つ実感を持ちながら、いきいきと自立する。孫世代へ畑仕事や虫取りを教えるのもいいでしょう。孫たちは自然に馴染んでのびのび育つ。親世代は仕事にはつらつと専念できる。そんな三世代が自立・共生できる街、安心して老いられる街に守

けた患者さんが地域の病院でリハビリや服薬、栄養指導を受け、速やかに自宅へ帰つてかかりつけ医の元へ。一方、具合が悪くなると近くの診療所へ、必要な場合はそこから紹介された病院へ行く。このような患者さんの動きと患者さんの医療情報が連動し、患者さんを健康へと導くすべての医療関係者がその情報を共有することが望まれます。滋賀全域の医療機関の連携が円滑に進められる国内初のこの仕組みが、現実のものになろうとしています。



ITを活用して組織や細胞の病理診断を行う「遠隔病理診断ネットワーク」の説明を聞く

山が成長した時、それを各地に広げていきたいと考えています。

大道●最後に健康づくりへのアドバイスをお願いします。

菅田●身体は正常から異常へと移る境界で必ずサインを出します。その声を聞く耳を持ち、かかりつけ医と相談しながら丁寧に対処すれば、多くの場合、正常に戻ります。一方、心の健康には余裕が大切です。他者を思いはかる心のゆとりは人間だけが持つ特権。健康づくりの主役は私たち自身であることを常に忘れないでいたいものです。

大道●これからも湖国の心と身体の健康のために活躍を期待しています。本日はありがとうございました。